信仰による救い

著者：佐々木 正明

日付：2009 年 12 月 7 日

【この文書について】

本エッセイは、著者による長年の伝道・宣教活動の体験と聖書理解に基づき、日本にとっての『信仰による救い』を再考する試みです。現在の文化的・宗教的背景を踏まえた、神学的・宣教学的な視点が提示されています。

信仰による救い

2009 年 12 月 7 日

西九州伝道所　佐々木正明

日本の宣教が思うに任せない状態にあることは、だれもが認めるところです。いろいろな理由が挙げられてきました。祈りが足りないだとか、献身が足りない、愛が足りない、熱心さが足りない、伝道が足りないなどという、「霊的な方々」のお叱りから、日本は悪霊に取り囲まれているから、悪霊を追い払わなければならないという、「超霊的な方々」の主張もあります。また、日本古来の神道や仏教の偶像礼拝が、神の祝福を妨げていると説く人たちもいます。

ただ伝道者の端くれとして筆者が考えて来たのは、少し方向が違います。筆者は、日本人が福音に対して閉鎖的である点に注意を向けてきました。宣教師として日本以外の国での宣教に携わり、様々な国、いろいろな文化の中の宣教と、その結果を見て考えさせられたことは、福音を伝える側の問題と共に、聞く側にある問題についてです。聴く者の心理的状態が、福音受容に大きく影響しているのです。そしてそれを作り出している主なものが社会的要因、あるいは文化の問題です。イエス様がおっしゃった通り、同じ福音の種が蒔かれても、種が落ちた土地の状態によって、まったく異なった結果が現

れるのです。日本の土壌は西欧の土壌とも、アフリカやラテン・アメリカ、あるいは東南アジアの土壌とも異なっているのです。

ただし、日本が他の国と異なっているのは、悪霊に支配されていることではありません。日本は悪霊に支配されているから、伝道が困難なのであるという言い方には、聖書的根拠がありません。悪霊は「この世」を支配しているのであって、日本が特別なわけではありません。偶像礼拝の故に神の祝福を受けられないというのも、聖書の教えとは言えません。福音化される前の文化は、どこも偶像礼拝の文化でした。福音化されても、まだまだ偶像礼拝が盛んです。アメリカの教会のほとんどは、物欲、金銭欲という貪りの偶像を拝む、「資本主義自由経済教」を奉じています。（コロサイ３：５）

現在この宗教が、アメリカの教会だけでなく、ほとんど、世界中のキリスト教会に入り込んでいます。この宗教は、世界中に不均衡と不平等、貧困と困窮を生み出しています。この宗教は多くの戦争を起こし、無数の人々を殺してきました。しかも、その、マモンという神を崇拝している教会のほうが、繁栄している教会、成長している教会ともてはやされているのです。もしも日本人の偶像礼拝が糾弾されなければならないとしたら、マモン礼拝をし続けている現代教会の多くのほうが、数倍も厳しく責められなければなりません。キリスト自らが、神と金の神に同時に仕えることは出来ないと、断言しておられるのです。

偶像礼拝のために、イスラエルが祝福を失ったのは事実です。天地を創造された神が、疑う余地のないほど明らかにご自分を現し、「婚姻関係」を結んでくださったにもかかわらず、偶像礼拝に走って、夫である神に背いてしまったためです。ところが、イスラエル以外の人々が偶像礼拝をしたために神の祝福を失い、救いに与ることが出来なくなるというのは、聖書が教えることではありません。神は、偶像礼拝をしている異邦人を、祝福から遠ざけるためではなく、彼らを救うために、あらゆる困難な準備をしてくださったのです。

日本人が福音に心を閉ざしている理由について、筆者はいろいろな機会に述べてきました。第一に、キリスト教が、西欧植民地主義諸国の手先と思われても仕方がない形で日本に到来したために、国を守ろうとした為政者たちが、国家的反キリスト教政策を採ったからです。徳川幕府と明治政府はそれぞれ仏教と復古神道を利用して、国民的洗脳とも言える手段をもって、効果的に反キリスト教の心理状態を作り出し、西欧植民地主義国家に対抗したのです。

このようなことは、たとえば、お隣の韓国にはありませんでした。韓国と日本は、いろいろな意味で良く似ているのですが、キリスト教との接触においては、まったく違います。韓国は歴史的に、キリスト教あるいはキリスト教国の、脅威を感じることがなかっただけでなく、かえって好意を持って迎えることができたのです。ですから、韓国で成功した伝道方法を取り入れたとしても、日本で同じような成功を見ることは期待できません。欧米や東南アジアの国々で成果を上げた伝道方策を輸入しても、よい結果を見

ることは困難です。日本だけが特異な国だと主張する気はありませんが、ことキリスト教との接触と反応となると、日本はやはり特殊なのです。

第二に、日本に到来したキリスト教が聖書の教えるキリスト教ではなく、西欧文化の衣を着たキリスト教、西欧化したキリスト教だということです。そのために、キリスト教との接触が希薄で、独自に発展してきた日本の文化、習慣、あるいは日本人の情緒そのものが、西欧キリスト教からは「反キリスト教的」とみなされてしまいました。そこで、あからさまに日本の文化を敵に回すような宣教が行われて、日本人の反キリスト教感情を、いっそう逆なでしてきたのです。独自の文化に誇りを持っていなかった民族や国家は、西欧文化と混同した宗教でも喜んで受け入れましたが、自分たちの文化と国家に強い誇りを持っていた日本人の中では、キリスト教を敵視する精神が形成されてしまったのです。

第一の問題についてはすでにいく度か述べて来ましたので、今回は、第二の問題について語りたいと思います。日本における福音宣教の福音が西欧的福音であり、聖書の福音と少し違うのではないか、そしてその違いが、日本における福音伝道を困難にしている、一つの大きな要因ではないかということです。

Ｉ．わたしたちの伝統的伝道方法

日本の宣教を困難にしていると思われるのは、プロテスタント・キリスト教の中心的命題、パウロが全生涯を賭けた命題、すなわち信仰による義、信仰による救いに関わることです。この信仰による救いを、私たちはことさら難しいものにしてきたのではないでしょうか。

わたしたちが日本で伝道する場合、伝統的に「神・罪・救い」という三段階の説明、あるいは説得が必要だと教えられ、その通りだと思ってきました。他の教団のことは良く知りませんが、少なくても、バックストンなどの影響を受けていた、伝道熱心なわたしたちの先輩は、そのように教えてくださったものです。今、日本で進められている宣教を覗き見ると、どうやら、「神・罪・救い」の伝道方法は、わたしたちだけのものではなく、プロテスタントの多くの教会に及ぶもののようです。

Ｉ．A.　簡単な神の説明

日本人には聖書が教えるような神観念、あるいは神知識はありません。日本人の神観念は、ある意味で非常に聖書の教える神の姿に近いのですが（後述）、やはり、まったく違うものです。ですから、しっかりした神知識がなければ、伝道にはなりません。ところが、わたしたちはどうしても、「欧米キリスト教国」での伝道の真似をしてしまいます。キリスト教が教える神についての、基礎的な知識を持っている西欧諸国の伝道では、神について説明する必要はほとんどありません。すぐに罪に行き、悔い改めに進むことが出来ます。その西欧的な伝道方法が、日本においては通用しないことに、宣教師

たちや日本人伝道者も、いくらかは気付いたのでしょう。少なくても、神についての基礎的知識が必要だと判断して、「神・罪・救い」で、神を最初に持ってきたのです。

そこで大急ぎで、手っ取り早く神の説明をすることになります。ところが、それはあまりにもおざなりである上、日本の神についての反感からか、日本の古来の神観念を軽蔑し、あるいは敵視し、やたらに「本当の神」、「真の神」とくり返して、日本人の心に敵愾心を植えつけてしまいます。「本当の神」、「真の神」と言うごとに、「日本の神は嘘の神だ」、「あなたが信じている神は偽の神だ」と、実に心無い言葉を吐いていることにさえ気付かないのです。軽蔑と敵愾心のあるところに、心の交流はありません。心の交流のないところに、効果的な伝道もあり得ません。

欧米型キリスト教は、神道的な神観を侮蔑し、偶像礼拝として糾弾することに集中してしまうだけで、神道的神観がどれほど崇高であり、どれほど聖書の教える神の姿に近いかなどということに、気付くことはありません。日本人の神概念を、まじめに観察しようなどというクリスチャンは、ほとんどいません。そこで聖書の翻訳まで、まことに心無い、挑戦的な言葉になってしまうのです。ためしに、パウロとバルナバがルステラを訪れたときの出来事を口語訳聖書で読むと、パウロはルステラの人々の神礼拝を「愚にもつかないもの」と「愚弄」したことになっています。確かに愚にもつかないことでしたが、やはり個人的な糾弾の態度があらわな「愚にもつかない」よりも、新改訳聖書のように、「むなしい」とでも翻訳するのが妥当でしょう。天地創造の神について、もっと心をこめた説明が必要です。

I．B.　しつこい罪の糾弾

人を救いに導くためには、キリストの救いを理解させなければならないと、「聖書的」なクリスチャンは信じています。キリストの救いを理解させるには、どうしても罪を理解させ、自分が罪人であることを理解させ、その事実を認めさせ、受け入れさせ、告白させ、悔い改めさせなければならないと考えます。確かに聖書も、悔い改めを強調しています。バプテスマのヨハネのメッセージは、「悔い改めなさい。天のみ国が近づいたから」でした。キリストの働きも、まったく同じ言葉で始まりました。そこでわたしたちも悔い改めを語るために、一所懸命、罪の話をくり返します。日本人は、あまり罪に対する感覚というか、概念を持ち合わせていないために、罪を理解させ、自分が罪人であると納得させるのは、容易なことではありません。そこで勢い、しつこく、際限なく、罪、罪、罪、罪と言い続けることになってしまいます。

I．C.　キリストについての知識

わたしたちの熱心な罪の話を忍耐深く聞いていた人が、やっと、罪について少し理解し、たとえ犯罪者ではなくても自分は罪人だと、まあ、理屈の上では同意するとしても、今度は、その罪を神が憎んでおられることが理解できるように、力を込めて語らなければなりません。神が徹底して聖いお方であると、納得させなければならないので

す。まだ、神の豊かな恵みも、祝福も、人間にたいする優しい配慮と取り扱いも語る前に、神の絶対の聖さのゆえに、どんな恐ろしい刑罰が定められているかを語らなければなりません。

スポルジョンが、「罪を語るときには、聞く者たちが神の刑罰の恐ろしさに震え上がるように語れ」と言ったことを思い出しながら、神の裁きを語った上で、罪からの救い、罪の刑罰からの救い、永遠の滅びからの救い、神の怒りからの救いを説明しなければなりません。神の聖さが充分に語られなければ、神の愛の救いが明確に理解されないからです。

そして今度は、神の愛を語らなければなりません。聖さのゆえに、人間を罰して止まない神がまた愛の神であり、なんとしても人間を救おうとなさっている神であると、説明しなければならないのです。そして神はご自分の聖さを犠牲にせず、愛を遂行するために独り子キリストを、身代わりに十字架につけて殺してくださったことを、説明しなければなりません。すると当然、三位一体にも触れなければ、理解してもらえません。でも、三位一体を理解してもらうことなど、初めから無理です。それでも、その難関を乗り越えなければならないのです。たとえその難関を乗り越えても、まだ終わりではありません。今度は、身代わりの死という難しい理屈を、理解してもらわなければなりません。

Ｉ．D.　性急な悔い改めの勧め

キリストの身代わりの死を理解してもらえば、それで終わりなのではありません。自分の罪が神の痛み、神の苦しみ、キリストの苦難を生み出すことになったことを理解し、それを認め、感謝して、悔い改めなければならないのです。

ここまで説明し、納得して受け入れてもらうのは、それこそ大変な仕事です。難解この上ない理屈が次から次に出てきて、躓きになる話が後から後から続きます。物凄く多量の情報の理解と、「信仰」による跳躍と、無理やりの納得と、嫌々ながらの受容が必要です。ひと筋縄の説得やふた筋縄の説明では、とても追いつきません。一日や二日の仕事ではありません。何ヶ月も何年も必要です。とても並みの信徒に出来る働きではありません。よほど訓練をつみ、知識と知恵にあふれた信徒でも不可能です。もっぱら、牧師の活動になりそうです。牧師だって簡単にはできません。専門的知識と能力が必要になります。伝道とはかくも難しい務めなのです。だから日本の伝道は進まないのです。

それでも日本人は、面と向かって他人を失望させたくありません。熱心で親切なクリスチャンをがっかりさせないために、伝道される側は、「この場かぎりのこととして」、お付き合いの同意をするのです。でも同意をしたが最後、今度は告白と悔い改めを迫られます。ところが、告白と悔い改めを迫られても、まだ、神の聖さにも、神の愛にも、キリストの十字架にも、自分が罪人だということにも疑問だらけです。納得して

いないのです。神がどれほど素晴らしいことをしてくださっているかが、分かっていないのです。説明するクリスチャンもまた、聞いている人が分かっていないと分かっているのです。自分のへたくそな説明で、理解できるわけがないと、悟っているのです。ですから、この告白と悔い改めは、神に造られた人間として、神のみこころに沿わない生き方をして来たことに対するものではなく、人に迷惑をかけただとか、親不孝をして来たとか、飲んで暴れただとかいう、枝葉のことに終わってしまうのです。

これで、告白と悔い改めは済んだのですが、本当の意味での告白と悔い改めにはなっていません。伝道にはなっていないのです。やたらに難しいことを言われて、少しも理解できず、納得も出来ないことに、無理やり同意させられただけのことです。そんなことがふつうの日本人には起きているのです。

Ⅰ．E.　プロテスタントの神学の誤りから

でもそのような伝道が、福音的な伝道方法とされてきたわけです。個人伝道法でも、キリストの十字架と悔い改めの入っていないものはありません。「信仰による義」、「行いによらない救い」を、錦の御旗として掲げてきたプロテスタントの福音派は、このような神の理解と罪の理解と十字架の理解と悔い改めの理解を、絶対必要条件としてきたのです。聖書的であると自負する教会は、それが聖書の教えであると言って譲りません。

本当にそうでしょうか。これで本当に「信仰による義」、「行いによらない救い」と言えるでしょうか。これが、パウロが必死になって守ろうとした福音でしょうか。ルターが命を賭けた福音でしょうか。これでは救いとは、少なくても、まともな神の知識さえ持っていない一般の日本人にとっては、「知識による救い」、すなわち学びと理解と呼ばれる「行いによる救い」にならないでしょうか。本当の信仰による義とは、行いを伴わない単純なものではないでしょうか。

わたしたちは聖書を学んできました。そして、救われるためにはキリストの十字架が必要であることを知っています。信仰の重要性も知っています。神の聖さも神の愛も知っています。でもそれは、本当に聖書を読んで学び取ったことでしょうか。それとも、西欧の神学を通して聖書を読んだ結果の知識でしょうか。

西欧の神学がみな間違っていると言っているのではありません。大部分は正しいことでしょう。でも、日本という異文化に入ってきたとき、西欧的な聖書の理解と西欧的な聖書の適用では、役に立たないことが多いのです。西欧的な背景で構築された神学による伝道では、日本人に理解されることも受け入れられることもないのです。同じ種でも、蒔かれた土地によって結果は異なるのですが、日本の場合は、種自体に西欧文化のコーティングがされていることが多いのです。あるいは、本当の福音の種ではなく、ひとたび西欧の土壌に蒔かれて、少しばかり芽生えた苗を移植しようとしていると言ったほうが、分かりやすいでしょうか。

ですからわたしたちは、いま、日本人として聖書を読み直さなければなりません。西欧プロテスタント・キリスト教の神学ではなく、日本人的感覚で聖書を読み、日本人的な神学の構築をし、日本人的な伝道を試みなければなりません。それは実に様々な方面に及ぶ大仕事でしょう。しかしそれが必要なのです。

Ⅱ.　アブラハムの例に学ぶ

日本的な感覚で聖書を読み、日本的な神学を構築し、日本的な伝道を試みる手始めとして、まず、アブラハムが信仰によって義とされた出来事から、学んでみたいと思います。このアブラハムが得た信仰による義こそ、パウロが命をかけ取り組み、建て上げた、神学的金字塔であり、プロテスタント神学の基盤だからです。また、アブラハムが信仰によって義とされた文化背景あるいは宗教背景は、いわゆるキリスト教文化といわれる西欧文化とは程遠く、むしろ偶像文化といわれる日本に近いものです。神々があふれていながら、また宗教心は極めて旺盛でありながら、天と地を造られた神について知っている者は、まったく居なかったのです。

アブラハム本人も、キリスト教的な神の概念がまったくない中で生まれ育ちました。彼の故郷はシュメール文化の中にあったのです。多分、月を礼拝していたのではないか思われます。そのような中で大人になったのですから、彼の宗教観はまったく異教的だったのです。ところが彼は、神の特別な計らいによる自己啓示で、神を知るようになり、神を信じて救いを体験するのです。

Ⅱ. A.　アブラハムの信仰

アブラハムは神を信じました。神はそれをアブラハムの義と認められたのです。それが創世記に記されたことです。アブラハムは神を信じたという言葉は、彼は神を信仰したという意味ではありません。「信仰」という日本語は「信じ仰ぐ」ということで、それなりによい言葉です。しかし聖書が強調するのは信じて仰ぐことではなく、信じて頼ること、「信頼」です。単純に頼ることです。「アブラハムは主を信じた」と記されたときのアブラハムは、すでに長いあいだ神を信仰していました。ところがここで改めて、「主を信じた」、主を信頼したと言われたのです。

しかもその信頼は、救いだとか、罪の赦しだとかいう問題に関わることではなく、年老いているにも拘わらず、子どもを与えるとおっしゃった神を信頼したことです。ところが、このとき彼が信頼した内容は、実際のところ、たいしたものではなかったのです。アブラハムは、神のお言葉通り、自分の身から出る子を持てると信じたのですが、自分の子孫が地のちりよりも多くなるという約束は、相当前から与えられていたものです。改めて与えられた約束も、妻サラとの間の子という理解で信じたのかどうか、明らかではありません。たぶん、初めのうちはそのような期待もあったかもしれません。ところがサラは、その後もぜんぜん身ごもる気配がありませんでした。それで、サラの言葉を入れて、エジプト女性のハガルによって子を儲けようとしたのです。うまず女の妻

によってではなく、他の女性によって子を儲けることならば、奇跡でも何でもありません。よく行われていた習慣に過ぎないのです。そのような小さな信頼、消え入りそうな信頼であっても、信頼の本質はその中に存在しました。それを神は汲み取ってくださったのです。

もちろん、神様とのその後のやり取りのなかで、アブラハムは、妻サラによって子を持つことが出来ると信じ、そのとおりになったのですが、彼が義とされる元となった信頼を持ったのは、あくまでも、子を持てると信じた時点なのです。アブラハムが義とされた信仰は、非常に小さく不明瞭なものでした。それなのに神は、人を義とするための唯一の条件を満たすものとして、その小さく不明瞭な信仰を受け入れてくださったのです。また当然ながら、アブラハムが神を信じたのは、このときが最初ではなかったはずです。神が与えると約束された土地に向かって旅を始めたとき、すでに信じていたのです。その後も、いく度も神を信じたことがあったでしょう。そのような信頼の積み重ねの上に、子を与えるという約束、星の数ほどの子孫を与えるという約束を信じることができたのです。信仰とは一瞬の出来事ではなく、継続的というか、積み重ねであるというのも、とても大切です。

天地創造の神の存在を前提とした文化の中では、救いは、自分の罪を悔い改めて、キリストの贖いの死が自分のためであったと信じた、その時に与えられると考えられています。でもこれは、とんでもない間違いです。正しくは、キリストの死が自分のためだと信じて救われるのではなく、自分の罪のために死に、また甦ってくださり、いま生きていて、わたしたちを救おうとしておられる、キリストを信頼することによって救われるのです。でも、いま言おうとしているのはその問題ではありません。問題は、西欧では救いを瞬間的な出来事と理解していることです。

天地創造の神の存在を知っていながら、その神を無視して自分勝手な生き方をしてきた人々は、その生き方を悔い改めた瞬間を自覚できることでしょう。涙にぬれて悔い改めたという話も、ずいぶん聞いたものです。しかし、天地創造の神を知らないで生きてきた人々にとって、事はそれほど簡単ではありません。長い時間をかけて随分いろいろ考え、体験し、散々迷い、あるときは信じあるときは疑い、いったい自分はクリスチャンになったのかどうかさえ、良く分からないような曖昧な時を費やして、少しずつ信頼が増していくのです。多くの日本人クリスチャンは、いつ自分がクリスチャンになったのか、確実に言うことが出来ません。いつ悔い改めたのかも分からないのです。

救いの瞬間は人間が言い当てるものではなく、神だけがご存知のことなのです。アブラハムが神を信じたのは、一回だけの出来事ではなく、積み重ねであり継続であるとはそういう意味です。その継続的な信頼を一つの出来事、一つの信頼に集約して、神は、義と認めたと宣言してくださったのです。実際にアブラハムが義と認められたのは、多分、子どもを与えるという神の言葉を信じたときではなく、もっと以前のことだったのではないでしょうか。神の召命を受けて、カナンへ向けて出発したときだったかもしれません。確実なことはわかりませんが、子どもが与えられると信じたときまで、アブラ

ハムは義と認められていなかった、つまり救われていなかったと考えるのには無理があります。子どもが与えられると信じて義とされたというよりも、その時に改めて、義と認められたことが宣言されただけなのかも知れません。とにかくはっきりしているのは、アブラハムは信じただけ、信頼しただけで、わたしたちが「悔い改め」と呼ぶ行為をしないまま、救われたという事実です。

Ⅱ．B.　アブラハムの神についての知識

　アブラハムの神理解、いわゆる知識としての神理解は、実に微々たるものに過ぎませんでした。聖書を所有し、様々な本を読み、多くの人々と話して知識を蓄えることが出来る、現代のわたしたちと比べることは出来ません。

アブラハムは偶像崇拝の中に生まれ育ったのです。ただ、彼の信仰心の素直さなどに、優れた資質をご覧になった神が、彼を選び、イスラエルの父とし信仰の父とするために、ご自分の側から近寄ってくださったのです。神はアブラハムに声をかけ、ご自分を現してくださいました。アブラハムは神の命令に従って、長い旅を続けることになりました。その旅の中で、アブラハムは体験的に神を知るようになったのです。体験的神理解が増すごとに、知識としての神理解も増したことでしょう。とは言え、それは非常に限られたものでした。いうなれば、彼の神理解は、幼子が母親を理解するような理解だったのです。

　アブラハムは果たして、神を、天地創造の神として信じていたのでしょうか。唯一絶対、全知全能の神として信じていたでしょうか。時間と空間と物質を越えた、超次元の神として信じていたでしょうか。完全に聖い神、大きな愛の神として信じていたでしょうか。三位一体の神として信じていたでしょうか。そのような知識は、実にわずかしか持ち合わせていなかったはずです。むしろ彼は、当時、周囲の人々が信じていた多くの神々の中で、この方こそ自分の神だという選択をし、この方こそより優れた神であると信じて、この方を礼拝し、この方に聞き従うという決意をして生きていたのです。その過程で、神は折々ご自分を現してくださり、さらに正しい神理解へと導いてくださったのです。神に義とされるのは、正しい神知識を持つからではありません。正しい神学的理解をもつことに越したことはありませんが、それは義とされる条件ではないのです。もしも正しい神理解が救いの条件となると、人類歴史の中で誰一人として救われる者はいなかったはずです。またこれからも、救われる者は出ないでしょう。

Ⅱ．C.　　アブラハムの罪の悔い改め

　アブラハムが義とされたと宣言されたとき、罪の悔い改めは伴っていませんでした。アブラハムは神を信じただけ、信頼しただけです。それが義と認められた唯一の理由です。アブラハムが義とされるために、罪の悔い改めは必要条件ではなかったのです。罪の自覚とその事実の認容、そして悔い改めと告白など、わたしたち「信仰のみ」を信条

とする福音派の教会が、知らず知らずのうちに加えている救いの条件は、出る幕ではなかったのです。

神は、罪の悔い改めをしていない人間を、義と認めることが出来たという事実は、非常に重要です。それはアブラハムだけの例外的処置だったのではありません。もしそうだとすると、アブラハムが信仰によって義とされたという事実も、例外的処置として、アブラハムにだけかかわることになります。すると、パウロの信仰による義認の教理自体が立ち行かなくなるからです。

アブラハムが、今わたしたちが持っているような意味での、罪の自覚を持っていたかどうかは確かではありません。神はアブラハムに罪の自覚を生じさせ、悔い改めに導くことをせず、ただ、神に信頼することをお求めになったのです。では、アブラハムに罪の悔い改めは不要だったのでしょうか。その生涯のどこかで、強烈な罪の自覚が生じて、悔い改めたことがあったかもしれません。イサクを捧げたときなどは、罪の自覚にふさわしい瞬間だったかも知れません。神に対する正しい信頼は、必ず神との深い交わりを生み出し、その交わりは罪の自覚と悔い改めを促すからです。ただ、彼が義とされたときは、悔い改めが要求されていなかったのです。

Ⅱ．D.　アブラハムのキリストについての知識

アブラハムはイエス・キリストのイの字も知りませんでした。彼はキリストよりも 2 千年も前の人物です。イエス・キリストを通しての、神の救いの計画も知りませんでした。もちろん十字架の存在も、そこにある代償の死の意味も知りませんでした。アブラハムが救われるために、キリストについて知る必要もなかったのです。人が救われるのは、人がキリストを知っているかどうかではなかったのです。あくまでも、キリストの贖いの働きそのものに力があったのであり、人の知識に効力があったのではありません。神が人をどうご覧になるかです。

もちろん、旧約時代のアブラハムが救われるためにも、キリストの贖いの働きが必要でした。人が救われるためには、キリストの十字架の代償の死が絶対必要条件です。ただし、救われる人がキリストについて、またキリストの働きについて知っている必要はないのです。旧約時代の人々は、だれもキリストを知りませんでした。人が救われるのは、人間の側に知識があるかどうかではなく、神の側ですべての必要な準備を整えてくださったことによるのです。昨日も今日も明日も関係なく、永遠を現在とされる神が、すべてを知り、すべてを計画し、すべてを成し遂げてくださるのです。人はキリストのことを知らなくても、神が知っておられるのです。そしてそのキリストの死のゆえに、神は小さな信仰を持った人間を受け入れることができるのです。旧約時代の人々は、やがて立てられるキリストの十字架のゆえに、救いを得ることが出来ました。新約時代の人々は、すでに立てられた十字架のゆえに、救いを受けることができるのです。

Ⅲ．新約聖書が教える救い

新約聖書によると、確かに救いは悔い改めを前提としていると、考えられるところもあります。それで、悔い改めとは「行い」ではなく、信仰の一部分だと考えたりするわけです。本当の信仰は真摯な悔い改めを含むと判断するのです。でも、悔い改めは罪の理解と、罪人であるという自己判定と、その判定の受け入れと、神の義と愛・・・・・その他いろいろな知識を必要とします。それではやはり、人間の理解という「行為」が必要となってしまいます。

Ⅲ．A．神知識を前提とした悔い改め

新約聖書は、神に関する知識を前提として、悔い改めを語っていることに気付かなければなりません。悔い改めなさいと迫ったバプテスマのヨハネも、キリストも、ペンテコステの日のペテロも、神に関する充分な知識を持っていた、ユダヤ人に対して語ったのです。異邦人伝道をしたパウロも、多くの場合、ユダヤ人の会堂で話をしましたので、異邦人とは言え、改宗者や神を敬う人々、すなわち、神については相当の知識を持っている人々に語っていました。パウロの書簡もすでに信仰を持った人々へ宛てたものです。

ところが、まだ創造者である神のことを知らない人々と接触し、彼らに福音を伝えようとしたとき、パウロは異なったアプローチをしていることに気付きます。彼はユダヤ人に対するように、直ちに罪を責めて悔い改めを迫る前に、まず、天地創造の神について語っているのです。（使徒１７：１６～３２）　使徒の働きの記録は要約されていて、パウロが語った説教のすべてが記されているわけではありません。ですからたとえ記事は短くても、パウロは天地創造の神について、かなり詳しく語ったと考えられます。またアテネの人々は、いつも哲学的で宗教的な議論と黙想を重ねていたために、神についても鋭い理解と洞察を持っていたわけです。

ルステラにおいて、パウロはギリシャの神ヘルメスと間違われ、同行したバルナバもゼウスに間違えられました。このときも彼は天地創造の神、あらゆる必要を備え、あまねく恵みをお与えになる神を伝えようとしています。（使徒１４：８～１８）　天地の造り主である神に立ち返るようにというのが、彼の福音の導入なのです。（ｖ．１５）このときのパウロの言葉を、口語訳聖書は「愚にもつかぬものを捨て」という、偶像礼拝への軽蔑を露骨に表した訳語にしていますが、先にも述べましたように、訳者の先入観と感情がこもりすぎていると思います。こういう感覚が問題なのです。確かに愚かなことであり、虚しいことでしたが、軽蔑の念を露わにするのはパウロの態度ではなかったはずです。パウロは、教会に向けて神学的に語ったローマ書の一章では、異邦人の偶像礼拝を厳しく責めていますが、異邦人に向けての実際の伝道の場では、異なった態度をとっているのです。

パウロはアテネの論者たちに福音を語ったとき、「悔い改め」、「神の義」、「裁き」などに話を持って行く前に、「知られない神」から始めて、聞いている人々に充分な神知識を与えることから始めました。神の知識を充分に持たせせた上で、「悔い改め」

を語っています。　　（v．３０）　この場合、パウロは「罪」という言葉さえ用いていません。罪を持ち出さずに、悔い改めを語ったのです。もちろん実際には、パウロは罪について語った後に、悔い改めを語ったのかもしれません。ただ、少なくてもルカは、この出来事を記録するに当たり、「罪」について書く必要を感じなかったのでしょう。パウロが指摘したことは、人間の技巧や空想の産物である空しい偶像礼拝の時代を、神が見逃して来られたという事実と、いまや、悔い改めなければならないときが来ているという事実です。

罪を明確にしないまま「悔い改め」を語るのは、おかしなことです。ただし、ここで「悔い改め」と翻訳されている言葉の広い意味を考慮すると、充分に理解できるものです。悔い改めと翻訳されている言葉は、もともと、「思い直す」とか「考えを改める」とかの意味だったようです。それがだんだん、「たち帰る」、あるいは「向きを変える」の意味も、持つようになったと考えられています。新約聖書以前の古典ギリシャ語では、「後悔」の意味では用いられていますが、現代日本語の「悔い改め」の意味合で用いられることは、ほとんどありませんでした。それが 70 人訳に至って、わずかですが「悔い改め」の意味に用いられるようになり、いわゆる中間期の文書で多用されるようになりました。新約聖書、特に福音書では、明らかに「悔い改め」の意味で用いられています。先に触れたように、キリストもバプテスマのヨハネも、そういう意味で用いています。（ただし、キリストもヨハネもギリシャ語ではなく、アラム語を使ったと思われますので、ギリシャ語に翻訳されたとき、その言葉が選ばれたというのが正確です）

パウロがアテネで語った言葉は、旧約聖書やユダヤ教の文書には馴染みのない、哲学的思考に慣れているギリシャの人々に向かって語られたものですから、ユダヤ的に「悔い改めなければならない」と訳すより、ギリシャ的に「たち帰れと命じておられます」と訳したほうが良いように思います。14 章 15 節には「たち帰る」と訳されている別の言葉がありますが、この言葉は、17 章で「悔い改め」と訳されている言葉と同義語、あるいは非常に近い意味の言葉だったと考えられます。26 章には、アグリッパ王に対するパウロの弁明が記されていますが、その中で、話がユダヤ人宣教から異邦人宣教に及んだとき、パウロは「『悔い改めて』『神に立ち返り・・・・・』」と語りました。（ｖ．20）　ここでパウロは、これら二つの同義語、あるいは、二つの非常に近い意味の言葉を並べて、意味を強調しているのです。

パウロは、まだ天地創造の神を知らない人々、まだ神がご自分を明確に現しておられない人々に対しては、ユダヤ人に対するのと同じ意味で、「悔い改めなさい」とは語っていないと考えられるのです。同じ言葉を用いても、ユダヤ人の理解と異邦人たちの理解は異なっていたのです。分からないまま、知らないまま神を拝んでいた人々に対し、また誤って神でもないものを神としていた人々に対して、パウロは、「悔い改めなさい」と叱責しているのではなく、「今までの考えを改めて」、天と地をお造りになった神に「たち帰りなさい」と勧めているのです。

パウロは、当時アテネで盛んだった神殿娼婦や男娼のことを責め立てるのではなく、大酒飲みや、放蕩をなじるのでもなく、神を偶像と取り替えている「罪」のことを、あまり「罪、罪」と厳しく責め立てることもせず、天地創造の神に「たち帰る」ことを勧めているのです。パウロは、神を知らない人々に対しては、神を知らない人々に対する伝道をしていたのです。（後述）

Ⅲ．B．キリストを信じるということ

救いに関して新約聖書は、神を信じることより、むしろ、キリストを信じることを強調しています。それはまず、新約聖書の大部分がすでに神を信じている人々の中で、神を信じている人々を読者に想定して書かれているからです。

ユダヤ人にとってキリストは待ち望まれた救い主であり、キリストの出現自体が福音であり、その死と甦りは、ユダヤ人たちに新しい救い主の概念を与え、信仰と服従を要求するものでした。ですから、キリストによって展開された新しい福音を信じること、イエスという人物がキリストであると信じ、そのキリストに信頼することが絶対必要条件でした。キリストが国家的な、政治的軍事的救い主ではなく、個人的な罪とその結果からの救いをもたらす救い主であることに、信頼しなければならないのです。

また、キリストがただイエスでなく、「主イエス」と言われていることも大切です。この場合の「主」は単に、人間的主従関係や尊敬の念を表す「主」ではなく、神であることをあらわす「主」だったのです。ですから使徒も他の信徒たちも、ユダヤ人の間でも異邦人の間でも、神であるイエス・キリストを宣べ伝えていたのです。死から甦られたイエスは、神であり、救い主だということです。甦りという出来事が、まだまだ新鮮にクリスチャンたちの心に炎となって燃えていた頃には、そのような宣教が核になっていたことは、充分に理解できます。

使徒や弟子たちが、異邦人に対して、いったいどのようにキリストを語っていたのかは不明です。キリストの十字架の意義、神の聖さ、神の裁き、キリストの代償の死について、伝道の始めから語っていたとは考えられません。アテネでのパウロの説教を見ると、キリストは贖い主としてよりも、甦った力ある裁き主として語られています。裁き主としてキリストを紹介できる文化的な背景、あるいは哲学的、宗教的背景があったのかもしれません。そのようなアプローチがパウロには良いと思われたのでしょう。ただ、裁き主としてのキリストを語ることは、贖い主のキリストを語るよりも簡単だったのだろうと思われます。

ともあれ、キリストの贖いや神の愛と聖などについての、複雑な説明を最初に持ってこないで、まず、天地創造の神を知らせ、その神にたち帰ることを進める、伝道のしかたもあるのだということが分かります。

Ⅳ．日本伝道の心がけ

日本人は、八百万の神々を信じる多神教徒であると、どこかの宣教師が書いていました。山も海も木も草も、太陽も月も神として礼拝すると説明されていました。犬でも猫でも豚でも神にしてしまうと蔑まれていました。そして、わたしたちの神こそ本当の神であると、誇らしく結ばれていました。なるほどふつうの宣教師たちは、今でもその程度の理解しか持っていないのかと、情けなくなりました。

この宣教師の理解が、まったくの間違いだということではありません。ただ、そのような感覚と民族的優越感があいまって、千五百年代からの数百年間、世界中のいたるところで、非キリスト教徒に対する、蔑視と差別と迫害が行われて来たことを知らなければなりません。最も純真な信仰集団であったと思われているピューリタンでさえ、上陸した北アメリカ大陸でずいぶん多くのインディアンを、野蛮な異教徒として苦しめました。移住してきたキリスト教徒のために、多くのインディアン部族がほとんど消滅に近い状態になっているのです。それはただ、旧大陸から持ち込まれた疫病によるだけではなく、浅薄な聖書理解から発生した、非キリスト教徒の信仰に対する敵意と無理解によってもたらされたものです。

非キリスト教信仰に対する、そのような無理解と蔑視、あるいは敵意を持ったまま日本の伝道を試みても、日本人に受け入れられることはまずあり得ないのです。受け入れられる伝道をするためには、心がけなければならないことがあります。

Ⅳ．A.　　しっかりと神を説明する

宣教師たちは、真の神を知らずに愚にもつかないものを拝んでいる（口語訳聖書使徒行伝１４：１５）、日本人に対して、最も重要なことは、その愚にもつかない偶像の神々を捨てさせ、真の神を信じさせることだと確信しています。宣教師たちは、日本人に偶像礼拝を止めさせることこそ、先決問題だと考えているのです。日本人牧師も信徒も、それに倣っているようです。いきおい、その宣教姿勢は高圧的対決型、敵対形となり、日本人の心を頑なにしてしまいます。

Ⅳ．A. １．日本人が知らないで拝んできた神

先日、近くの小学校のグラウンドの前を通りかかると、近所の人たちが大勢集まって、収穫感謝祭をしていました。ふつうアメリカ生まれと言われているこの祭りが、こんな田舎にも入り込んでいるのには驚かされました。また、いまどき小学校のグラウンドをこのようなことに使える、「わが田舎」にも微笑を浮かべたものです。ただ、見ていると、どこにも宗教的色彩はありませんでした。アメリカならば、収穫を与えてくださる創造主に感謝するのが一般的ですが、ここではその部分がすっぽりと抜け落ち、ただ、秋の収穫をみんなで喜び、みんなで食べるお祭りになっていました。

宣教師や日本のクリスチャンも、このような宗教的色彩のない集まりには、良心の呵責もなく参加できるでしょう。でも、もしもこれが神道の神、あるいは神々に感謝を捧げる感謝祭であったなら、決して参加しないと思うのです。偶像礼拝の罪になると考え

るからです。でも、うれしい収穫の背後に、見えない方の祝福を感じ、良くは分からないまでも、ひととき敬虔な思いになり、その見えない方に感謝を捧げる気持ちを表現するのと、誰にも感謝せず、自分たちの労働を誇り、ただ飲み食いして喜び合うのと、人間としてどちらが良いのでしょう。人間が人間であるということは、見えない方に祈り、感謝を捧げることです。多分、まったく宗教色のない収穫感謝祭であっても、集まった日本人の多くは、収穫を与えてくださる優しく大きな見えない方を背後に感じ、そっと感謝の気持ちを蓄えていたのだと思います。子どもたちも、大きな鍋で煮た「だご汁」を食べる前に、誰に向かってなのかは分からないまま、みんな、大きな声で「ありがとうございます。いただきます。」と言うように教えられていたようです。

パウロはアテネの人々が「宗教にあつい」ことを認めています。宗教心を持つこと、何かを神として礼拝すること自体を悪と決め付けず、かえって、たとえ形の上だけであったとしても、賞賛している点が重要です。日本における伝道の足跡を振り返ると、どうも、宗教心を持つこと自体、何かを礼拝すること自体が、非常に重大な「偶像礼拝の罪」であるかのような、言い方をして来たのです。

確かに偶像礼拝は、パウロがローマ書一章で言うように、見えない神の不滅の栄光を見える朽ちるものの姿に変えてしまった、人間の罪の源です。ところが、いく度も述べているように、異邦人の偶像礼拝の罪は、出エジプト後のイスラエル人が偶像礼拝を犯して責められるようには、責められていないのです。イスラエル人が偶像礼拝の罪を責められているのは、神の力、神の救い、神の愛、神の恵みが疑うことが出来ないほど明らかに示された、出エジプトの出来事の後に、神を裏切って偶像礼拝をしているからです。同じ偶像礼拝をしていても、日本人は、イスラエル人が神を裏切ったようには、裏切っていないのです。卑近な譬えで語るなら、結婚前の女性がいろいろな男性に目を配り、あれやこれやと迷い、ときには媚を売るのも認めましょう。結婚したいと望むのは女性の本能なのです。しかしひとたび結婚したならば、もう、いろいろな男性に目を向けてはならないのです。あれやこれやと目を配り、媚を売ってはならないのです。イスラエルは結婚した女性。日本人は結婚前の女性です。

大切なことは、日本人が極めて強い宗教心を持ち、神を礼拝して来たという事実です。それは、日本人も神に似せて造られた人間であり、始めから神を感じ認識する本能、礼拝する本能、祈る本能を持っていたからです。もしもこの本能が与えられていなかったら、どれほど伝道しても、神について説明しても、人間は、あたかも猫や犬のように、絶対に神を信じることができないのです。ただ、異邦人である日本人には、まだ、神の姿が明らかに啓示されてはいませんでした。そのために、正しく神の姿を思い描くことが出来ないままに来たわけです。それでいながら古来の神道は、世界中の多くの宗教とは異なって、偶像を持たず、見えない神を見えない神のまま礼拝してきたことにも、尊敬を払わなければなりません。

これまでの伝道は、天地創造の神を信じる前に、まず、すべての神々を捨てるように勧め、無神論者になるように励ましてきました。でもクリスチャンになるためには、い

ちど、すべての宗教すべての神々を捨てて、無神論者にならなければいけないというのは、神が与えてくださった人間本来の性質に反することです。極端に言えば、というより原則を言うならば、日本人が救われるためには、汎神論的感覚、あるいは多神論的理解、さらにはアニミズム的世界観を捨てる必要はないのです。八百万の神々の存在と力を信じ続けながら、救われることができるのです。幽霊を信じながらでも、怪奇現象を信じながらでも、救われることはできるのです。聖書が強調しているのは、そのような神々の存在や何やら分からない力を否定して、唯一の神、天地創造の神を信じることではありません。そのような諸々の神々、力、権威の中にあって、ただ、天地をお造りになった神だけを、自分の神として信頼すれば良いのです。

　わかり易くするために例を挙げますと、クリスチャンになりたての人の家に、仏像があっても、神棚があってもかまわないのです。日本人がクリスチャンになるのは一瞬の決心によるよりも、理解と決心と体験の積み重ねの上でのことです。その過程で偶像があってもかまわないのです。やがて偶像についての正しい理解もできて、取り除いていくことが出来るのです。そのクリスチャンが家長であったり、親族のなかでも力のある人物であったりすれば、昔、ヤコブがやったように、独断で偶像やそのたぐいのものを運び出し、始末してしまうことも、あるいは可能かもしれません。しかし、何人もいた妻の一人のような立場や、下僕や召使のような弱い立場にあったとしたら、ずいぶん複雑で注意深い取り扱いが必要だったはずです。

　パウロはアテネの人々に向かって、「あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう」と語りかけました。ギリシャ神話に出てくる、煩雑で騒がしい神々を礼拝していた人々の中にさえ、わずかながらの真実の礼拝の痕跡や芽生えを見いだし、それを手がかりに話を進めようとしたのです。パウロは、ギリシャ人たちが、「真の神」を拝んできたわずかな可能性を取り上げて、アテネの人々に敵対することなく、敵に回すことなく、感情を害することなく話のきっかけを作ったわけです。

パウロはギリシャ人たちが、知らずにではあったとはいえ、真の神を礼拝していた可能性を認めているのです。ギリシャ人たちがまったくあずかり知らない、外国の神について語り、外国の神を持ち込もうとしたのではなく、パウロは、「あなたたちが礼拝してきた神」について語ろうとしたのです。天地創造の神は昔からアテネにも居られ、アテネの人々に、わからないまま、知られないまま礼拝されていたと、パウロは語っているのです。

　同じように、日本人も、昔から日本にいてくださった神を礼拝し続けてきました。「西欧キリスト教の神」は、フランシスコ・ザビエルの衣装箱の中に入れられて、日本にまで運ばれてきたのかもしれません。フィリピンのカトリック教徒が必ず持っている、サント・ニーニョという偶像は、その名が示すように幼子だったキリストを偶像化したものですが、元はと言えば、フィリピンを侵略しようとしたマゼランによって、持ち込まれたものに過ぎません。しかし天地創造の神は、天地創造以来、ずっと日本にいてくださった神です。というより、日本が神の中にあったのです。日本人はこの神の中

に生き、動き、また存在してきたのです。（使徒１７：２８）　日本人はこの神を、あらゆる被造物の中に感じ、畏れをもって崇めてきました。ただ、曇ってしまった宗教感覚と理性のために、日本人は、その中に神性を感じたあらゆる被造物を、神として崇めてきた一面もあります。それとても、お造りになった神の性質が、被造物の中にも反映しているのだと、正しく理解することができなかっただけのことです。

確かに日本人には、汎神論的、多神論的感覚があります。ところが同時に、日本人には非常に強い一神論的感覚もあることを知らなければなりません。日本人は、実に様々な神社にお参りに行きます。社や祠を訪ねて、うやうやしい気持ちになって手を合わせ、頭を垂れます。ところが、どこの神社に行こうが、どこの社を訪ねようが、そこに祀られている神が誰であるかということには、ほとんど興味を示しません。たとえまったく違う神であり、時には互いに敵対する神々であっても、まったくお構いなしに敬虔に礼拝するのです。その感覚には、表面上に祀られている神が誰であり、なんと言う名前だろうと、それは仮の姿、あるいはそこに現れたうわべの姿に過ぎず、その背後に居られる神は一つの神、大きく、豊かで、恵みにあふれている唯一の神、あるいはすべての神々、すべての力をまとめておられる一人の神だという、強い感覚を持ち合わせているのです。

クリスチャンたちは、一休さんが詠んだといわれる、「分け入れるふもとの道は多けれど同じ高嶺の月をこそ見れ」という歌が大嫌いです。どんな宗教、どんな宗派でも、行き着くところは結局みな同じだという、日本人好みの意味にも取れるからです。たしかにそれは間違いです。とはいえ、ここに日本人の強い一神教的感覚が現れていると、考えられないでしょうか。あらゆる宗教の向うに、究極的真理を見ているのです。わたしたちは違いを強調して、戦いながら語るのではなく、共通点を見いだし、同じ立場に立って、仲良くするところから始めるべきです。ある人たちにとって、それはまるで妥協しているかのように感じられることでしょう。でも、それがパウロの方法でした。そのようにして、怒らせたり、敵対感情を持たせたりせずに、取っ掛かりをつかむと、しっかりと天地創造の神を伝えることも可能になるはずです。

Ⅳ．A．２　日本人を恵み続けてこられた神

西欧キリスト教の神は、16 世紀の中頃に、やっと日本に到着しました。しかし、天地をお造りになった神は、神代の時代よりも昔、天地創造のときから日本にいてくださった神です。その時から、太陽を昇らせ、雨を降らせ、花を咲かせ、穀物を稔らせ、獣を生かし、魚を増やし、日本人の心を喜びに満たして来てくださった神です。日本の国土と日本人をこよなく愛し、豊かに恵み、育んできてくださった神です。（使徒１４：１７）

日本人は、頭では分からないまま、理屈では説明できないものの、その神を心で感じて、「なにごとのおわしますかは知らねども　かたじけなさに涙こぼるる」という西行の歌に、頷いて来たのです。わたしたちは、分からないままではありますが、素朴に、

その神を祀り礼拝し、感謝を捧げて来た日本人を、「偶像礼拝者」と決めつけ、神を裏切って偶像礼拝に走ったイスラエル人に対する、厳しい叱責の言葉を投げつけてもよいものでしょうか。むしろパウロのように、「あなたたちが、知らないまま熱心に拝んできた神様は、わたしたちも拝んできた神様です」と言って、近づくことは出来ないのでしょうか。

日本人がその神をなんと呼ぼうが、どんな性格付けをしようが問題ではありません。一人の神と考えていようと、多くの神々と思い込んでいようと、たいした問題ではありません。神は、イスラエル人には明確にご自分を啓示してくださいました。でも、日本人にはそのようになさっていないのです。日本人は本能的に神を感じ、素朴に畏れ敬い礼拝して来ただけです。実際伝道の場におけるパウロは、ギリシャ人たちの歌まで引用して、聴衆と自分との間にあるギャップを埋めようとしたのです。存在している神々を否定し、まったく知られていない外国の神を持ち込むという態度ではなく、わたしたちは同じ神を礼拝しているのですと、共通の立場を築こうと努力しているのです。

もしも、わたしたちがパウロほどの賢さを持っていたなら、決して日本人的な宗教感覚をあざ笑ったり、軽蔑したりはしないことでしょう。聖書をもって神学の摩天楼を築き上げてきた、西欧の人々の神観も信仰観も道徳観も、聖書を持たないで生きてきた日本人の神観と信仰観と道徳観に比べて、どれほど優れていると言えるでしょうか。もしもパウロが、・・・・・もちろん、仮定の話に力が無いことは百も承知していながら、つい、言いたくなるのです・・・・・日本人が持ち続けてきた素朴な神道的神観を知ったなら、ひどく驚くことでしょう。先に触れたように、古来の神道には偶像というものが無いのです。パウロがローマ書一章で語った、「不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と変えてしまいました」という言葉は、古来の神道には当てはまらないのです。（ｖ．23）

昔、悪ガキだった筆者は、よく、村の神社の境内でかくれんぼをしたものです。あるとき、社殿の縁の下にもぐりこんだついでに、鎮守の神様を探ろうと床板を押し上げて侵入し、奥深くまで探ってみたものです。ところが偶像らしきものは一切ありませんでした。それからいたずらが高じて、かなり大きな護国神社も含めて、幾つかの神社の奥深いところを探ってみたのですが、・・・・・すみません・・・・・米粒があったり、鏡があったりしたことはあっても、礼拝の対象になる偶像があったためしはありませんでした。神社には礼拝対象の偶像がないことを知った私は、「神社には神なんていない」と笑いましたが、むしろ笑われるのは私のほうだったのです。「神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みにならない」のです。（使徒１７：２４）
日本人はそれを理解しているのです。

神道は、理論的に語ろうとしたり理屈で説明したりしようとすると、非常に愚かなものになります。神があまりにも高く大きく、すべてのものを超越した存在であるため、小さな人間の頭脳ではとても把握も理解も説明もつかないのです。古来の神道は、西欧キリスト教とは違って、神学の宗教ではなく心の宗教なのです。何も分からないから良

い神なのです。説明がつかないから崇高な神なのです。それでも無理に説明すると、荒唐無稽になるか、グロテスクになってしまうわけです。単純で素朴な宗教心の発露、ほとんど民間信仰である神道を理屈で突き詰めると、いささか矮小な宗教とも非論理的な宗教ともなってしまいます。おかしくいじくり回すと、復古神道や国家神道のように、えせキリスト教的宗教にさえなってしまいます。それがために、科学的思考で育てられてきた現代日本人の多くは、「神なんて存在しない」と早まった結論に行き着いてしまうのです。それでいながら、見えない神に対する日本人の宗教心は、確かな方向を向いているのです。

日本人の神は、パウロがルステラで述べたように、「恵みを持って、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びで、『日本人』の心を満たしてくださった」方であり、そのことによって、「ご自身のことをあかしして」来られた方なのです。（使徒14：17）

Ⅳ．B.　罪を上手に取り扱う

神についての明確な知識がないままで育ったアブラハムは、罪を悔い改めずに救われました。アブラハムもたくさん罪を犯していたはずです。でも、彼にはまだ本当の意味での罪の自覚がなかったのです。罪を一つひとつ悔い改めるより、天地の創造者である方を知り、この方に信頼することが先決だったのです。

人間の罪は、人間が悔い改めて赦されるものではなく、キリストが身代わりに死んでくださったことによって、その効力によって赦されるのです。人間が悔い改めようが悔い改めまいが、キリストの贖いのみ業は完成しているのです。たとえ、キリストが生まれていなかったときでも、時間を超越しておられる神のご計画の中では、すでに完成していたのです。そのキリストの贖いのみわざの効力は、悔い改めによってではなく、神に対する信頼によって付与されるのです。

アブラハムが、福音派神学の言うような「罪の悔い改め」をすることなしに、神に義と認めていただいたことは、アブラハムと同じような環境に生きている日本人も、また同じように「悔い改める」ことなく、義と認めていただけるということです。新約聖書の神学、あるいは出エジプト以降の旧約神学における罪は、神の明らかな自己顕現の後に、自己顕現を与えられた民族の罪であり、神が誰であるかも知らない人々の罪ではないのです。

神を知らない日本人が、罪と言って思い浮かべるのは、ふつう、盗み、詐欺、暴力、殺人、あるいは横領、贈賄、収賄などの社会的な犯罪です。中には、悪意、敵意、偽り、ごまかし、まやかし、ねたみ、嫉妬など、人間関係の中の心の動きを思い出す人もいるかもしれません。確かにそれらは民事や刑事に触れる犯罪であり、また心の中ですでに犯している罪といえるでしょう。そのような罪について悔い改めるのも大切ですが、本当の悔い改めは、神との関係についての悔い改めです。社会的犯罪でも人間関係

に関わる罪でも、神との関わりで捉えなければ、とても浅薄なものになってしまいます。創造主である神を知らない日本人にとって、罪とは人間関係の事柄にすぎません。良心の存在でさえ、神のない人間関係、社会とか文化で捉えてしまい、それより奥には進まないのです。ですから、天地創造の神をはっきり知った上で、罪を理解することが必要なのです。

ところが人間には、知性と理性と感情だけではなく、霊性というものがあります。神に似せて造られたという部分です。この霊性という本能は、知性や理性では理解できなくても、直感的に神を感じることが出来、神を畏れる気持ちを持つことができる能力です。ですから、創造主である神を知らない日本人も、神の存在さえ否定する日本人も、本能的に神を感じ、神の存在と力を認めてきました。たとえ唯物論的な思考、物理的法則でしか物事を判断できない科学思考をもって、「神は存在しない」と言い切っても、その舌の根が乾ききらないうちに、神社へ詣で、寺へお参りをするのです。神を知らない日本人は罪を理解することはできないといっても、本能的に罪を感じることが出来るのです。

日本人が本能的信仰心から神社に詣でるとき、しばしば禊（みそぎ）という儀式をします。多くの神社の境内には、手を洗い口を漱ぐ水が置かれています。自らを清めてからでなければ、神に近づくことは出来ないと、これまた本能的に感じているのです。これは、罪とは少し違った、「穢れ」の感覚によるものです。なんら、具体的な罪も犯罪も思い当たらなくても、自分は、聖く気高く大きな神の前に出るにはふさわしくない、穢れた人間であると多くの日本人は感じるのです。しばしば、日本人には罪の意識が希薄だと言われますが、穢れの意識は強く持っています。それはふつうに言われる罪よりも本質的なもの、人間性の奥深くに潜む邪悪な性質に対する自覚、あるいは目覚めともいうべきもの、本能的な自覚です。ただこの穢れの感覚が曖昧になり、希薄になってしまったために、政治や経済の世界での犯罪を、「禊」で済ませてしまう日本人が多いことも事実です。「禊」は、罪の悔い改めをしないまま「なあなあ」であやふやに終わらせる、便利な逃げ言葉になっているのは残念なことです。

神を知らない日本人に、罪を理解させ、自覚させることは容易ではありません。日本という国は、聖書を持たず、天地創造の神を知らずに文化を形成し、国家を建て上げてきました。それで結構、よくやって来たのです。他の「キリスト教諸国」と比べても、遜色はありません。ですから、罪を責めても無駄に終わることが多いのです。ところが日本人は、多分、他の多くの国々の人々と同じように、本能的な罪意識を「穢れの概念」として持ち続けてきているのです。神の前に出るのには相応しくない人間であるという、畏れを心の奥深くに持っているのです。それを上手に糸口として話すならば、日本人を敵とせず、感情を害せず、心を傷つけずに、本当の罪に迫ることが出来るはずです。

日本人の罪は、神を知らずに来たことです。神が誰かを知らないまま神を呼び、神に感謝を捧げ、礼拝してきたことです。そこで、天地創造の神を教え、誰を礼拝するの

か、誰に感謝を捧げるのか、誰を賛美するのか理解させて、いままでの考えややり方を改めてもらえばいいのです。すると、自分たちの感謝も賛美も礼拝も、本来あるべき形からすると、とても足りないものであったことも分かるでしょう。神でもないものまでも呼び求め、神でもないものまでを賛美をしてきた、その愚かさも分かることでしょう。

Ⅳ．C.　日本人の信仰心に敵対しない

「神が存在すると思いますか？」という質問をすると、頭でっかちに育てられた日本人の大部分、９０％以上は、「存在しない」と答えます。ところがその同じ日本人が、みな、正月には神社に初詣に出かけ、入学の願掛けをし、お寺に参り、仏事を欠かさないのです。日本人は頭で神を否定し、心で神を信じているのです。ですから、頭から入っていこうとする理性的キリスト教は拒絶され、理屈も何にもあったものではない、ばかばかしい内容の宗教が流行るのです。これは、日本人の宗教心をよく現しています。日本人は、理屈で神を理解することは出来ない、理屈はどうでも良いと理解しているのです。それで、「大切なのは信じる心だ」と言われるようになって、日本人的観念論に至り、「鰯の頭も信心から」となってしますのです。ですから、心で神にアプローチさせる方法をとればよいのです。

日本古来の宗教は、素朴なアニミズムだと言われます。あらゆる物に神性を認め、何でも神にしてしまいます。だから、数限りない神々が生まれてきます。人間より少しでも優れていると思われる物は、なんでも神とされるのです。汎神論といわれ多神論と言われます。日本人のほとんどは、信仰心は大切で宗教は尊いと言いながら、自分は宗教を信じませんと言い切ってはばかりません。海外旅行をしていると、いろいろな書類に宗教欄というのがあります。そこに不用意に無宗教と書き込んで、とんでもない目に遭った日本人がたくさんいます。無宗教というのは、多くの国では、一番信頼の置けない人間ということになっているのを、知らないからです。日本人が、心では宗教を大切といいながら、理性的に考えて語ると神はいないとなるのは、神道の心はとても美しく尊いと思えるのに、神道の個々の神々を思うと、あまりにも幼稚でばかばかしいからです。

神道の精神というか、宗教心は尊いのですが、具体的にどの神、どこの神となると、まったく理性に反するものになってしまうのです。それでいて、キリスト教が非常に理性的な形で入ってくると、受け入れられないのです。宗教とは理性で入るものではないと、感じているからです。そして、宗教は理性から入るのではないというのは正しいのです。神は理性では絶対に把握しきれない存在です。私たちの小さな頭脳の許容量を、完全に超越しているためです。その素朴な宗教心を何とか表現すると、愚かしげな教えになってしまうのです。ですから、古来の神道には神学も教理もありません。あるのは、目に見えないものに対する素朴な畏れです。そして敬い、拝み、感謝する心です。

日本人は宗教心を大切にしますので、どのような神でもいいのです。具体的な神が祀られているより、良く分からないものが祀られているほうがいいのです。具体的なものの多くは、理性で考えるとそれこそ、「愚にもつかないもの」になってしまうからです。ただ、神というのは本来「上」という意味に過ぎませんから、少しでも尊敬できるものは神にしてしまいます。人が尊敬しているものを、むやみに愚弄してはなりません。国のために殉じた人々は、殉ずることをよしとした気高い精神のゆえに神になりました。彼らを祀っているのは尊い信仰心の現われであり、尊敬の表現です。だから、粗末に扱ってはならないのです。ところがキリスト教は、それを偶像礼拝となじり、国粋主義だと叫び、戦争の恐怖と結び付けて非難します。たとえ、靖国神社の存在に興味のない人でも、それをなじるキリスト教には、ふつうの日本人なら敵愾心を持ってしまいます。なぜ、同じ高嶺の月を見る心にならないのかと、いぶかります。

大多数の日本人の心には、復古神道や国家神道はありません。素朴な、目に見えないものに対する畏れがあるだけです。そして、それこそ最も大切なものです。日本人は昔からこの世にいてくださった方、日本にもいてくださり、日本を愛で、日本人を愛し、豊かに恵み、祝福し続けてくださった方を、心から崇めているのです。その目に見えない方を、見えるように表現しようという試みは、いく度もくり返されてきました。あるときは、仏教的な偶像に置き換えられようとしました。仏が姿を変えて、日本の神々となって現れてくださったのだという信仰も、かなり広く行き渡ったのです。あるいは、キリスト教や道教の教義の模倣で骨組みを与えられた、様々な宗派神道も現れました。でも、目に見えない方、何かは分からない大きな方という概念は、大方の日本人の心には払拭できないまま残っているのです。偶像で表現されることも拒み、体系づけられることも拒絶し続けている、この素朴な宗教心の現れを、私たち聖書を信じている者は、どのように受け取ればよいのでしょう。

日本人は、八百万の神々を信じていると言われていながら、実は強い一神教的要素、感覚、あるいは概念を持っていることはすでに述べました。たとえ表面的には多くの神々があっても、その背後、その彼方には、さらに大きなすべてを総まとめにしておられる方がいらっしゃると、日本人は感じているのです。ですから、どこの神社に行っても誰が祀られているかは問わず、同じ心で礼拝できるのです。

日本人は、新しい神が入ってきても、文句は言いません。それは新しい神ではなく、多分、知らないでいただけで、あるいは名前が違うだけで、もともと、日本にいた神に違いないと思っているのです。そこまで行かなくても、八百万の神々に一人加わっただけのことですから、どうということはありません。ですから、キリスト教の神が入ってきても、少しも問題を感じません。仲良く共存できるのです。あるいはこの神が、すべての神々と呼ばれるものの、背後にいらっしゃる方ではないかとさえ思うのです。ただ問題は、キリスト教が自分たちの神以外の神々を完全に否定し、揶揄し、非難し、罵倒し、見下し、愚弄し、押しのけ、破壊し、取り除いてしまおうとするところです。キリスト教が自分たちの神を宣伝するだけなら、神道はなんら問題を感じないのです。た

だ、自分たちの神々が、あるいは自分たちの礼拝が脅かされることに、憤りを感じるのです。

すでに触れたように、アブラハムの信仰は、他の神々を否定し破壊する信仰ではありませんでした。他の神々の存在や力や影響を信じたまま、ただ、自分のお仕えする方は、この方だと定めた信仰だったのです。それはより低い信仰のあり方であり、より原始的なヤーヴェ信仰であったことでしょう。しかし、アブラハムの生まれ育った文化、アブラハムが生きた環境の中では、それでもよかったのです。モーセの時代も、ヨシュアの時代も、ダビデの時代もそうでした。他の神々の存在と力を否定する必要はなかったのです。ただ、ヤーヴェこそ自分たちが仕える神であると定め、その決断を忠実に守りさえすればよかったのです。

それが、時代が進み、神についての理解がますごとに、強い神となり、唯一の神となり、唯一絶対の神となって、拝まれ畏れられるようになったのです。創世記の最初の一節で、私たちが拝むべき神は、天地創造の神、時間と空間と物質という次元を超えた神であることが明確に示されていましたが、人間がそれをしっかりと理解できるまでには、長い長い年月が必要でした。それを神は忍耐深く待っていてくださったのです。たとえ神についての理解が不充分でも、神はそれについてあまりとやかくおっしゃっていません。神に忠実であれば、つまり、頭ではなく、心が確かであればそれでよかったのです。現代でも、私たちは私たちの神を正しく理解できているわけではありません。理解できないからこそ私たちの神、すべてのものを超越しておられる神なのです。このちっぽけな頭で理解できた途端に、神は神でなくなるのです。

ですから私たちは、福音を語るに際して、日本の古来の信仰を否定する必要はありません。古来の神、あるいは神々を排除する必要もありません。アブラハムの時代、律法を与えられる前のイスラエル、神の明確な自己顕現があった前のイスラエルは、多くの神々の存在を糾弾することも嘲笑することもなく、ただヤーヴェの神を選択して仕えただけです。ですから、神の明確な顕現がない現代の日本においても、その原則は適用されるべきなのです。日本人の真摯な礼拝態度は賞賛されるべきです。見えないものに対する素朴な畏れは大切にされるべきです。そのような接触のしかたで始め、天地創造の神を説き、神の愛を語り、神の祝福を説明し、キリストの十字架の救いを教えたならば、日本人の多くは、もっと素直に受け入れることが出来るのではないかと考えるのです。

結び

アブラハムが義とされたのは、あくまでも信仰によります。彼の神に対する素朴な信頼が、神に喜ばれ、義とされたのです。福音主義の神学が言うような、悔い改めやキリストの十字架の理解などはありませんでした。行いによらない義が、私たちに適用される大原則だとしたら、悔い改めによらない義も、私たちに適用される大原則のはずです。アブラハムがキリストの十字架を知らなかったならば、私たちもキリストの十字架

を知らなくても良いのです。悔い改めやキリストの十字架の理解などは、かなり明確な神の理解が先行条件だからです。救いは、人間がどれほど神を知っているかに関わりません。神がすべてをご存知で、すべてを準備してくださったからです。必要なのは、神に対する単純な信頼です。

日本人に必要なのは、神を知ることです。伝道するわたしたちがしなければならないのは、他の神々を非難することでも否定することでもありません。天地創造の神をお知らせすることです。それこそ、異教文化における宣教の基本だと理解すべきです。それがパウロの方法です。異邦人である日本人に対する伝道を、イスラエル人に対する伝道と勘違いしてはならないのです。預言者たちが、イスラエルの背信の罪を責めたような感覚で、異邦人の偶像礼拝を責めてはならないのです。「キリスト教文化」といわれる中で育った人々に対するのと同じ感覚で、日本人の伝道を行ってはならないのです。

日本古来の信仰心、信仰態度、神観などを責めるのではなく、むしろ、聖書を持たないまま、良くぞこれほど高度な感覚を持ち続けてきたと賞賛しながら、聖書の神について語ればよいのです。そして「分からない神」「知られない神」から、聖書を通して、少しばかり知られるようになった神を、より正しい理解をもって礼拝するようお勧めすればよいのです。それが、アテネで語ったパウロの「悔い改め」だったのです。アテネでパウロが語った悔い改めを体験した人々は、やがて、ヨハネやキリストが語った悔い改めに進むことが出来るのです。このような方法で伝道を進めていくならば、天地創造の神を信じ、キリストの贖いを受け入れ、心から悔い改めて、神の救いを喜ぶことができる日本人が、もっと増えるのではないでしょうか。キリスト教は日本人に毛嫌いされることもなく、敵視されることもなく、もっと暖かい心で、受け入れられるのではないでしょうか。

日本の宣教は、思うに任せない状態にあります。この国の土壌は、キリスト教を根付かせない性質のものです。それは間違いありません。でも、日本の伝道をさらに困難にしている理由の一つは、蒔かれている種がコーティングされているからです。日本に蒔かれている種は、聖書にあるままの種ではなく、西欧文化というキリスト教的土壌に適応しやすいように、ずいぶん手を加えられた種なのです。わたしたちに必要なのは、もともと聖書にある種をそのまま蒔くことです。日本の土壌は、アブラハムの生きていた土壌に近いのです。

（今回、仏教に対する日本人の宗教感覚は取り扱いませんでした。機会があれば、取り上げて論じたいと思います）